広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝楽府訳注（二十四）：「関山月」七首
Author(s)	小川，恒男
Citation	中國中世文學研究，72：60 - 79
Issue Date	2019-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047689
Right	
Relation	

六朝楽府訳注（二十四）―「関山月」七首―

小川恒男

はしがき

前稿には「折楊柳」の残り二首と「関山月」四首の訳注を掲載した。梁元帝の作が一首、陳後主が二首、陸瓊が一首である。本稿には「関山月」の残り、張正見一首、徐陵二首、賀力牧一首、阮卓一首、江総一首、北周の王褒一首の計七首を掲載する。「関山月」からやっと『楽府詩集』巻二十三に入ったわけだが、来年中には巻二十四にたどり着きたいと考えている。

底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『楽府詩集』（中華書局　一九七九）である。

陳・張正見「関山月」

【本文及び書き下し】

1 巖間度月華　　巖間　月華度り
2 流彩映山斜　　流彩　山の斜めなるに映ず
3 暈逐連城璧　　暈は連城の璧を逐ひ
4 輪随出塞車　　輪は出塞の車に随ふ
5 唐蓂遥合影　　唐蓂　遥かに影に合はせ
6 秦桂遠分花　　秦桂　遠く花を分かつ
7 欲験盈虚理　　盈虚の理を験さんと欲せば
8 方知道路賒　　方に知る　道路の賒きを

【日本語訳】

1崖と崖との間から月が顔を覗かせ
2月の光が山の急な斜面を照らす
3月の暈は隣接するいくつかの町に匹敵するほどの価値がある璧のような丸い月を追い掛け
4月の輪は東から西へと塞外に出ていく戦車に付きしたがう
5コヨミグサは遠く離れているのに葉の数を月の満ち欠けとぴったり重なり合い
6秦羅敷が籠の柄にしたという桂は月の桂とは別々に花を咲かせる
7月が満ち欠けする道理が本当かどうかを確認しようとすれば
8関山が故郷から遠く離れていることが分かるのだ

【校勘】

○『文苑英華』巻百九十八・『古詩紀』巻百十一二

1「間」、『英華』作「開」。
7「理」、『英華』作「駛」、注云「一作『理』」。『詩紀』注云「一作「駛」。

【押韻】

「華」「斜」「車」「花」、下平九麻韻。

【作者】

生没年不詳。梁・陳に仕えた。字は見賾、清河の東武城（山東省東武城の西北）の人。梁の簡文帝が東宮にあった時、年十三にして頌を献じて大いに賞賛された。梁末の喪乱の際には匡俗山（廬山のこと）に難を避けたが、陳の武帝が即位（五五七年）するに及び、詔によって都建康に召還され、宣帝の太建（五六九～五八二）中に没した。時に年四十九。『陳書』三十四・『南史』七十二に伝がある。『陳書』本伝には「其五言詩尤善、大行於世。（其の五言詩　尤も善し、大いに世に行はる。）」と評するが、南宋・厳羽は『滄浪詩話』考証で「南北朝人惟張正見詩最多、而最無足省発。所謂『雖多亦奚以為』。（南北朝の人　惟だ張正見の詩のみ最も多くして、最も省発するに足る無し。所謂『多しと雖も亦た奚を以て為さん』。）」と酷評する。道坂昭広氏の「良くも悪くも陳の文学の一面を象徴する詩人である。」（興膳宏編『六朝詩人伝』大修館書店　二〇〇〇）という評が公平なところだろう。

【語釈】

1巖間度月華　2流彩映山斜

［巖間］崖と崖の間。晋・郭璞「江賦」（『文選』巻十二）に「或爆采以晃淵、或嚇鰓乎巖間。（或いは采を爆して以て淵を晃し、或いは鰓を巖間に嚇く。）」とあり、詩では晋・庾闡「観石鼓」詩に「翔霄払翠嶺、緑澗漱巖間（翔霄　翠嶺を払ひ、緑澗　巖間に漱ぐ）」と。

［月華］月の光。梁・沈約「応王中丞思遠詠月」詩（『文選』巻三十。『玉台』巻五作「詠月」。）に「月華臨静夜、夜静滅氛埃（月華　静夜に臨み、夜　静かにして氛埃滅す）」と。

［流彩］流采とも。流れる光、ここは月の光をいう。梁・江淹「贈銕丹法和殷長史」詩に「譬如明月色、流采映歳寒（譬へば明月の色の如く、流采　歳の寒きに映ず）」とある。橘英範氏「液体の月光―中国古典詩における月光表現管見―」（本誌第43号　二〇〇三）が液体のように表現される月の光について詳細に論じている。

［映山斜］切り立った山を照らす。「映山」、鮑照「代陽春登荊山行」に「日気映山浦、暄霧逐風収（日気　山浦に映じ、暄霧　風を逐ひて収まる）」とある。「山斜」は陳詩よりも前の用例は見当たらない。陳・江総「三日侍宴宣猷堂曲水」詩に「樹動丹楼出、山斜翠磴

危（樹　動きて　丹楼　出で、山　斜めにして　翠磴危し）」と。

3暈逐連城璧　4輪随出塞車

［暈逐連城璧］月の暈は璧の形に従ってまんまるになる。「暈逐」は月の暈が～の形に従う。梁・庾肩吾「和望月」詩に「円随漢東蚌、暈逐淮南灰（円かなるは漢東の蚌に随ひ、暈は淮南の灰を逐ふ）」と見える。「連城璧」は『史記』廉頗藺相如列伝に「趙恵文王時、得楚和氏璧。秦昭王聞之、使人遺趙王書、願以十五城請易璧。（趙の恵文王の時、楚の和氏の璧を得たり。秦の昭王　之れを聞き、人をして趙王に書を遺らしめ、願はくは十五城を以て璧に易へんと請ふ。）」とあるように、隣接するいくつかの都市に匹敵するほどの価値がある璧。璧は環状の平たい玉で、輪の幅が中央の穴の直径の二倍のもの。ここはその形についていう。

［輪随］満月が～についていく。やはり陳詩よりも前の用例は見当たらない。江総「七夕」詩に「輪随列宿動、路逐彩雲浮（輪は列宿に随ひて動き、路は彩雲を逐ひて浮かぶ）」とあり、「月輪」の語は斉・丘巨源「詠七宝扇」詩（『玉台』巻四作「七宝扇」）に「裁状白玉璧、縫似明月輪（裁は状る　白玉の璧、縫は似たり　明月の輪）」と見える。

［出塞車］国境の砦を通り東から西へと進む戦車。六朝詩では他の用例は見当たらない。

5唐蓂遥合影　6秦桂遠分花

［唐蓂］こよみぐさ。帝堯の時に生じたという瑞草。月の朔日から十五日までは一日に一莢を結び、十六日から晦日までは一日に一莢ずつ落ちることから莢の数で何日かが分かった。帝堯は陶唐氏と号したので「唐蓂」といい、また「堯蓂」「暦莢」「蓂莢」とも。『竹書紀年』巻上に「有草莢階而生、月朔始生一莢、月半而生十五莢。十六日以後、日落一莢、及晦而尽。月小、則一莢焦而不落。名曰蓂莢、一曰歴莢。（草莢の階にして生ずる有り、月　朔にして始めて一莢を生じ、月　半ばにして十五莢を生ず。十六日以後、日に一莢を落とし、晦に及びて尽く。月　小なれば、則ち一莢　焦きて落ちず。名づけて蓂莢と曰ひ、一に歴莢と曰ふ。）」と見え、『抱朴子』対俗に「唐堯観蓂莢以知月。（唐堯は蓂莢を観て以て月を知る。）」と。

［合影］影がぴったり重なり合う。梁・簡文帝蕭綱「餞廬陵内史王脩応令」詩に「疏槐未合影、仄日暫流光（疏槐　未だ影を合はせず、仄日　暫く光を流す）」と。ここは、互いが遠く離れているのに月の満ち欠けと蓂莢の葉の数が符合することをいう。

［秦桂］秦羅敷が三日月の形をした竹籠の柄を作るのに用いた桂の木。漢・無名氏「陌上桑」（『楽府詩集』巻二十八。『宋書』楽志作「艶歌羅敷行」。『玉台』巻一作「日出東南隅行」。）に「日出東南隅、照我秦氏楼。

秦氏有好女、自名為羅敷。羅敷善蚕桑、採桑城南隅。青糸為籠係、桂枝為籠鉤。（日は東南の隅に出で、我が秦氏の楼を照らす。秦氏に好女有り、自ら名づけて羅敷と為す。羅敷　蚕桑を善くし、桑を採る　城南の隅。青糸もて籠係と為し、桂枝もて籠鉤と為す。）」とある。

［遠分花］月に生えているという桂とは別々に花を咲かせている。簡文帝「望月」詩に「桂花那不落、団扇与誰粧（桂花　那ぞ落ちざるか、団扇　誰が与にか粧ふ）」と。

7欲験盈虚理　8方知道路賒

［欲験］本当かどうかを確認しようとする。陳・祖孫登「詠柳」詩に「欲験傷攀折、三春横笛中（欲験傷攀折するを傷むを験さんと欲す、三春　横笛の中に）」と。

［盈虚理］月が満ちたり欠けたりすることの道理。月日が容赦なく過ぎていくことをいう。「盈虚」、ここでは月の満ち欠けをいう。梁・劉孝綽「帰沐呈任中丞昉」詩に「自我従人爵、蟾兎屡盈虚（我の人爵に従ひてより、蟾兎　屡しば盈虚す）」と。

［方知］そこではじめてわかる。梁・劉緩「在県中庭看月」詩に「月光移数尺、方知夜已深（月光　移ること数尺、方に知る　夜の已に深きを）」と。

［道路賒］道のりが遠いこと。ここは関山が故郷から遥か遠く離れていることをいう。梁・庾肩吾「侍宴餞湘東王応令」詩に「念此離筵促、方愁別路賒（此れを念へば　離筵　促り、方に別路の賒きを愁ふ）」と。

陳・徐陵「関山月」二首其一

【本文及び書き下し】

1 関山三五月　関山　三五の月
2 客子憶秦川　客子　秦川を憶ふ
3 思婦高楼上　思婦　高楼の上
4 当窓応未眠　窓に当たりて応に未だ眠らざるべし
5 星旗映疏勒　星旗　疏勒に映じ
6 雲陣上祁連　雲陣　祁連に上る
7 戦気今如此　戦気　今　此くの如し
8 従軍復幾年　従軍　復た幾年ならん

【日本語訳】

1 隴山の上に十五夜の月
2 出征兵士は故郷に思いを馳せる
3 夫を思う妻は高い建物の上で
4 窓に向かったまま、きっと眠れずにいるだろう
5 参旗九星を描いた軍旗が疏勒を照らし
6 たなびく雲のように長々と続く軍隊が祁連山に上る
7 天空に現れた戦争の気がこのようであるからには
8 軍隊暮らしがあと何年も続くことはないだろう

【校勘】

○『徐孝穆集』巻一・『文苑英華』巻百九十八・『古詩紀』

巻百十
異同無。

【押韻】
「川」「連」、下平二仙韻。「眠」「年」、下平一先韻。先・仙同用。

【作者】
五〇七～五八三。梁、陳に仕えた文人。字は孝穆、東海郡郯（山東省）の人。父の徐摛は庾信の父庾肩吾とともに梁の太子蕭綱（後、簡文帝）の文学サロンを代表する文人であり、「宮体詩」の形成に大きな影響を与えた。徐陵も蕭綱に優遇され、その命を受けて『玉台新詠』を編集した。北朝に使いしている間に梁が滅びたが、苦難の末に南帰し、陳に仕え吏部尚書など高官を歴任して政治的にも重きを成した。また文壇の領袖として庾信と名を斉しくし「徐庾体」と称された。『玉台新詠』序」など文章でも優れた作品を残している。

【語釈】
1 関山三五月　2 客子憶秦川
[関山] 第2句「秦川」の語から推して、ここは隴山を指す。梁・元帝蕭繹「隴頭水」に「銜悲別隴頭、関路漫悠悠」と見え、『太平御覧』巻五十六に引く「三秦記」に「其坂九廻、不知高幾里。欲上者七日乃越。高処可容百余家、下処数十万戸。上有清水四注。俗歌曰、『隴頭流水、鳴声幽咽。遥望秦川、心肝断絶』。去長安千里、望秦川如帯。又関中人上隴者、還望故郷悲思、而歌則有絶死者。（其の坂　九廻し、高きこと幾里なるかを知らず。上らんと欲する者　七日にして乃ち越ゆ。高き処は百余家を容るべく、下き処は数十万戸。上に清水の四もに注ぐ有り。俗歌に曰く、『隴頭流水、鳴声　幽咽す。遥かに秦川を望めば、心肝　断絶す』と。長安を去ること千里、秦川を望めば帯の如し。又た関中の人　隴に上れば、故郷を還望して悲思し、而も歌へば則ち絶死する者有り。）」とある。
[三五月] 十五夜の月。「古詩十九首」（『文選』巻二十九）其十七に「三五明月満、四五詹兎欠（三五　明月満ち、四五　詹兎　欠く）」とあり、李善注は『礼記』礼運に「地秉陰竅於山川、播五行於四時、和而後月生也。是以三五而盈、三五而闕。（地　陰を秉りて山川に竅し、五行を四時に播き、和して後に月　生ずるなり。是を以て三五にして盈ち、三五にして闕く。）」とあるのを引く。
[客子] 故郷を遠く離れている旅人。魏・曹植「七哀」詩（『文選』巻二十三。『玉台』巻二作「雑詩」。）に「明月照高楼、流光正徘徊。上有愁思婦、悲歎有余哀。借問歎者誰、言是客子妻。（明月　高楼を照らし、流光正に徘徊す。上に愁思の婦有り、悲歎　余哀有り。借問す　歎く者は誰ぞ、言ふ　是れ客子の妻と。）」とあるのを意識すると思う。
[秦川] 陝西省から甘粛省にかけての秦嶺以北の平原。隴山と長安との間に横たわる。右の「関山」語釈を参照。

3 思婦高楼上　4 当窓応未眠
[思婦] 遠く旅に出た夫を思う妻。晋・陸機「為顧彦先贈婦」詩（『文選』巻二十四）二首其二に「東南有思婦、長歎充幽闥（東南に思婦有り、長歎　幽闥に充つ）」と見え、李善注は右に引いた曹植「七哀」詩を引く。
[高楼] 高い建物。「古詩十九首」（『文選』巻二十九）其五（『玉台』巻一作枚乗「雑詩」）に「西北有高楼、上与浮雲斉（西北に高楼有り、上は浮雲と斉し）」とあるなど、しばしば「思婦」がいる場所として設定される。
[当窓] 窓と向かい合う。「古詩十九首」其二に「盈盈楼上女、皎皎当窓牖（盈盈たる楼上の女、皎皎として窓牖に当たる）」と見え、また梁・何遜「詠娼婦」詩（『玉台』巻五作「詠倡家」。）にも「誰念当窓牖、相望独盈盈（誰か念はん　窓牖に当たり、相ひ望みて　独り盈盈たるを）」とあるように、梁代頃から高楼の思婦が帰らぬ夫を思う行為として描かれるようになる。
[応未眠] 眠れずにいるに違いない。梁・沈約「六憶」詩四首其四に「憶眠時、人眠彊未眠、解羅不待勧（眠る時を憶ふ、人　眠るも　彊ひて未だ眠らず、羅を解くは勧めらるるを待たず）」と。

5 星旗映疏勒　6 雲陣上祁連
[星旗] 星の名。参旗九星を指す。二十八宿の一つである参宿の西にあり九つの星から成る。『晋書』天文志上に「参旗九星在参西、一曰天旗、一曰天弓、主司弓弩之張、候変禦難。（参旗九星　参の西に在り、一に天旗と曰ひ、一に天弓と曰ひ、弓弩を之れ張り、変を候ち難を禦ぐを主司す。）」とある。ここは、三国魏・何晏「景福殿賦」（『文選』巻十一）に「参旗九旒、従風飄揚。（参旗九旒、風に従ひて飄揚す。）」とあるように参旗九星が描かれた軍旗をいう。
[疏勒] 西域諸国のひとつ。今の新疆ウイグル自治区喀什市の辺り。「疎勒」とも。『漢書』西域伝上に「自玉門・陽関出西域有両道。…。自車師前王廷随北山、波河西行至疏勒、為北道。（玉門・陽関より西域に出づるには両道有り。…。自車師前王の廷より北山、波河の西行するに随ひ疏勒に至るを、北道と為す。）」と見える。詩では梁代から視られるようになる。例えば簡文帝蕭綱「和武帝宴」詩二首其一に「校尉開疏勒、将軍定月支（校尉　疏勒を開き、将軍　月支を定む）」と。
[雲陣] 隊列が長く続く軍隊。『南斉書』孔稚珪伝に「使自青徂予、候騎星羅、沿江入漢、雲陣万里。（青より予に徂ぶまで、候騎　星のごと羅なり、江に沿ひて漢に入り、雲陣　万里ならしむ。）」と見える。また、「陣

雲」と同じく長くたなびく雲の意で用いられることもある。梁・何遜「学古」詩三首其一に「陣雲横塞起、赤日下城円（陣雲　塞に横たはりて起こり、赤日　下城に下りて円かなり）」

［祁連］山名。甘粛省西部から青海省東北へと続く山々の総称。匈奴の言葉で「天山」の意。『漢書』霍去病伝に「去病至祁連山。（去病　祁連山に至る。）」とあり、顔師古注に「祁連山即天山也。匈奴呼『天』為祁連。（祁連山　即ち天山なり。匈奴　『天』を呼んで祁連と為す。）」と。何遜「学古」詩三首其一に「追兵待都護、烽火望祁連（追兵　都護を待ち、烽火　祁連を望む）」と。

7戦気今如此　8従軍復幾年

［戦気］天空に現れる戦争の気配。『晋書』天文志中に「凡戦気、青白如膏、如人無頭、如死人臥、如丹蛇、赤気随之、必大戦、殺将。四望無雲、見赤気如狗入営、其下有流血。（凡そ戦気、青白なること膏の如く、人の頭無きが如く、死人の臥せたるが如く、丹蛇の如く、赤気　之れに随へば、必ず大いに戦ひ、将を殺さん。四望　雲無く、赤気の狗の如く入営に入るを見れば、其の下　流血有らん。）」と見える。

［今如此］今、眼の前の状況がこのようであるからには。聴衆に直接訴えかける表現だろう。何遜「行経孫氏陵」詩に「闃寂今如此、望望沾人衣（闃寂たること　今此くの如く、望望として　人の衣を沾す）」と。

［復幾年］これから何年もということはないだろう。「復」は「古詩十九首」其十に「河漢清且浅、相去復幾許（河漢　清く且つ浅し、相ひ去ること復た幾許ぞ）」とあるように反語の語気を強める働き。また、北周・庾信「送周尚書弘正」詩二首其一に「共此無期別、知応復幾年（共にす　此の無期の別れ、知る　応に復た幾年なるべきを）」と。

陳・徐陵「関山月」二首其二

【本文及び書き下し】

1月出柳城東　月　柳城の東に出で
2微雲掩復通　微雲　掩ひて復た通ず
3蒼茫縈白暈　蒼茫として白暈縈り
4蕭瑟帯長風　蕭瑟として長風を帯ぶ
5羌兵焼上郡　羌兵　上郡を焼き
6胡騎猟雲中　胡騎　雲中に猟る
7将軍擁節起　将軍　節を擁して起ち
8戦士夜鳴弓　戦士　夜　弓を鳴らす

【日本語訳】

1月が東にある城市である柳城の東に上り
2わずかな雲に隠れたかと思うとまた姿を現したりする
3白い暈をまとってうすぼんやりと
4遠くから吹き寄せる風を帯びている
5羌の兵が上郡で略奪を働いたとか
6遊牧民族の騎兵が雲中に侵入したとか
7将軍は割り符をかざして兵を起こし
8わが兵士たちは夜な夜な弓を鳴らして戦に備える

【校勘】

○『徐孝穆集』巻一・『文苑英華』巻百九十八・『古詩紀』巻百十
異同無。

【押韻】

「東」「通」「風」「中」「弓」、上平一東韻。

【語釈】

1月出柳城東　2微雲掩復通

［月出］月が姿を現す。『詩経』陳風・月出に「月出皎兮、佼人僚兮（月　出でて　皎たり、佼人　僚たり）」とある。

［柳城］現在の遼寧省朝陽市の西南。『三国志』魏書・牽招伝に「太祖将討袁譚、而柳城烏丸欲出騎助譚。太祖以招嘗領烏丸、遣詣柳城。（太祖　将に袁譚を討たんとするも、柳城の烏丸　騎を出だして譚を助けんと欲す。太祖　招の嘗て烏丸を領せしを以て、遣はして柳城に詣らしむ。）」と見える。また、『晋書』楽志下に「改『巫山高』為『屠柳城』、言曹公越北塞、歴白檀、破三郡烏桓於柳城也。（『巫山高』を改めて『屠柳城』と為し、曹公の北塞を越え、白檀を歴て、三郡の烏桓を柳城に破りしを言ふなり。）」とあり、漢の短簫鐃歌の一つである「巫山高」を曹操が烏丸を破ったことを記念するために「屠柳城」に改めたという。

［微雲］わずかな雲。『世説新語』言語に「司馬太傅斎中夜坐、於時天月明浄、都無纖翳、太傅歎以為佳。謝景重在坐、答曰、『意謂乃不如微雲点綴』。太傅因戯謝曰、『卿居心不浄、乃復強欲滓穢太清邪』。（司馬太傅　斎中に夜坐し、時に於いて　天　月　明浄にして、都て纖翳無く、太傅　歎じて以て佳と為す。謝景重　坐に在り、答へて曰く、『意に謂へらく　乃ち微雲の点綴するに如かず』と。太傅　因りて謝に戯れて曰く、『卿居心不浄、乃ち復た強ひて太清を滓穢せんと欲するや』と。）」と見えるが、六朝詩では他の用例は見当たらない。

［掩復通］月が隠れたり現れたり。梁・武帝蕭衍「擬青青河畔草」（『玉台』巻七）に「月以雲掩光、葉以霜催老（月は雲を以て光を掩はれ、葉は霜を以て老いを催さる）」（「催」、原作「摧」、拠清・紀容舒『玉台新詠考異』改。）

3蒼茫縈白暈　4蕭瑟帯長風

［蒼茫］ぼんやりかすんでいる様。畳韻。梁・沈約「夕行聞夜鶴」詩（『玉台』巻九）に「海上多雲霧、蒼茫失

洲嶼（海上　雲霧多く、蒼茫として洲嶼を失す）」と。
［縈］とりまく。『詩経』周南・樛木に「南有樛木、葛藟縈之（南に樛木有り、葛藟　之れを縈る）」とあり、「毛伝」に「縈、旋也。」と。
［白暈］月にかかる白い暈。戦争で敵に包囲されると月に暈が現れ、蘆の灰で円形を描いてその一部を取り除くと、月の暈もそれに応じて欠け、敵の包囲も解けるという言い伝えがあった。後主「関山月」二首其一「暈欠随灰減」句【語釈】参照。『史記』天官書に「漢之興、五星聚于東井。平城之囲、月暈参・畢七重。（漢の興るや、五星　東井に聚まる。平城の囲みに、月　参・畢に暈すること七重。）」と。
［蕭瑟］風の音。双声。三国魏・武帝曹操「苦寒行」（『文選』巻二十七）に「樹木何蕭瑟、北風声正悲（樹木何ぞ蕭瑟たる、北風　声　正に悲し）」と。
［帯長風］遠くから吹き寄せる風に吹かれる。「長風」は宋玉「高唐賦」（『文選』巻十九）に「長風至而波起兮、若麗山之孤畝。（長風　至りて　波　起こり、山に麗くの孤畝の若し。）」と見え、斉・陸厥「臨江王節士歌」に「秋思不可裁、復帯秋風来（秋思　裁つべからず、復た秋風を帯びて来たる）」と。

5 羌兵焼上郡　6 胡騎猟雲中

［羌兵］中国西北部遊牧民族の兵。「羌」は青海周辺に居住した遊牧民族。漢代には西羌と呼ばれ匈奴の勢力下にあって、しばしば中国に侵入した。
［焼上郡］上郡で略奪を働いた。「上郡」は秦代に設置された郡の地名。治は膚施県（陝西省榆林市）に置かれた。『漢書』五行志中之上に「後六年春、天下大旱。先是、発車騎・材官屯広昌。是歳二月、復発材官屯隴西。後匈奴大入上郡・雲中、烽火通長安、三将軍屯辺、又三将軍屯京師。（〔文帝〕後の六年の春、天下　大いに旱す。是れより先、車騎・材官を発して広昌に屯せしむ。是の歳の二月、復た材官を発して隴西に屯せしむ。後匈奴　大いに上郡・雲中に入り、烽火　長安に通じ、三将軍　辺に屯し、又た三将軍　京師に屯す。）」との記事が見える。
［胡騎］遊牧民族の騎兵。『史記』韓王信伝に「（漢）十一年春、故韓王信復与胡騎入居参合、距漢。（十一年春、故の韓王信　復た胡騎と入りて参合に居り、漢を距ぐ。）」と。詩では梁・劉孝威「隴頭水」に「時観胡騎飲、常為漢国羞（時に胡騎の飲ふを観れば、常に漢国の為に羞づ）」といった用例が見られる。
［猟雲中］雲中で略奪を働いた。「雲中」は秦代に置かれた郡の名。内モンゴル自治区フフホト市周辺。前句「焼上郡」【語釈】参照。

7 将軍擁節起　8 戦士夜鳴弓

［擁節］軍権を表す割り符をかざして。「節」は符節。『周礼』地官・掌節に「掌守邦節而弁其用、以輔王命。（邦節を守るを掌りて其の用を弁じて、以て王命を輔く。）」とある。「擁節」の語は晋・盧諶「覧古」詩（『文選』巻二十一）に「秦王御殿坐、趙使擁節前（秦王　殿に御して坐し、趙使　節を擁して前む）」と見えるが、こちらの「節」は使者であることを示す旗指物。李善注は『礼記』玉藻「凡君召以三節、二節以走、一節以趨。（凡そ君の召すときには三節を以てし、二節には以て走り、一節には以て趨る。）」の鄭玄注「節所以明信、輔君命也。（節は信を明らかにし、君命を輔くる所以なり。）」を引く。
［戦士］兵士。漢・李陵「答蘇武書」（『文選』巻四十一）に「当此時也、天地為陵震怒、戦士為陵飲血。（此の時に当たるや、天地　陵の為に震怒し、戦士　陵の為に血を飲む。）」とあり、魏・阮籍「詠懐」詩八十二首其六十に「戦士食糟糠、賢者処蒿萊（戦士　糟糠を食らひ、賢者　蒿萊に処る）」と。
［鳴弓］弓の弦を鳴らして戦の準備をする。六朝詩には他の用例は見当たらない。隋・楊素「出塞」に「厳譙息夜斗、騂角罷鳴弓（厳譙　夜斗息み、騂角　鳴弓罷む）」とあるが、この「鳴弓」は強い弓の意。

陳・賀力牧「関山月」

【本文及び書き下し】

1 重関斂暮煙　重関　暮煙を斂め
2 明月下秋前　明月　秋前に下る
3 照石疑分鏡　石を照らして　分鏡かと疑ひ
4 臨弓似引弦　弓に臨んで　引弦に似る
5 霧暗迷旗影　霧　暗くして　旗影を迷はせ
6 霜濃湿剣蓮　霜　濃くして　剣蓮を湿す
7 此処離郷客　此の処　郷を離るるの客
8 遥心万里懸　遥心　万里に懸く

【日本語訳】

1 辺境の堅固な砦に夕靄が集まり
2 明るい月が中原の秋よりも早く沈んでいく
3 石を照らしている時には鏡の破片かと思い
4 兵士の弓を照らしている時には引き絞った弓に似ている
5 霧が立ち籠めて軍旗のすがたを見分けできなくなり
6 霜がびっしり降って剣のハスの模様を濡らすかのように
7 ここは故郷を離れた兵士たちが
8 心を万里の彼方に飛ばすところなのだ

【校勘】

○『文苑英華』巻百九十八・『古詩紀』巻百十七
4 「引」、『英華』作「共」、注云「一作『引』」。
5 「霧」、原注云「一作『雲』」。（底本誤作「雷」。）『英華』作「雲」、注云「一作『霧』」。

【押韻】

「煙」「前」「弦」「蓮」「懸」、下平一先韻。

【作者】

生没年など未詳。今に伝わる詩は二首のみ。『文苑英華』巻百九十八に「関山月」、巻二百八十六に「乱後別蘇州人」詩を収める。

【語釈】

1重関斂暮煙　2明月下秋前

［重関］辺境の堅固な砦。この語は三国魏・曹植「美女篇」（『文選』巻二十七）に「青楼臨大路、高門結重関（青楼　大路に臨み、高門　重関を結ぶ）」と見え、伊藤正文氏（中国詩人選集『曹植』　岩波書店　一九五八）は「二重のカンヌキの意であろう。」とされる。固く閉ざされた門を意味したと考えられるが、ここでは「関山月」との楽府題と相俟って辺境の砦の意として解した。

［斂暮煙］夕靄が収まる。「暮煙」、何遜「慈姥磯」詩に「暮煙起遥岸、斜日照安流（暮煙　遥岸に起こり、斜日　安流を照らす）」と。また簡文帝蕭綱「経琵琶峡」詩に「夕波照孤月、山枝斂夜煙（夕波　孤月に照らされ、山枝　夜煙を斂む）」と。

［秋前］中原の秋よりも早く。陳・何胥「被使出関詩」に「鶯啼落春後、雁度在秋前（鶯の啼くは春後に落ち、雁の度るは秋前に在り）」と。

3照石疑分鏡　4臨弓似引弦

［分鏡］「破鏡」と同じく鏡の破片かと思う。鮑照「翫月城西門解中」（『文選』巻三十。「解」、本集作「**廨**」。**『玉台』巻四作「翫月城西門」**。）に「始見西南楼、纖纖如玉鉤（始めて西南の楼に見れ、纖纖として玉鉤の如し）」とあり、李善注は『西京雑記』に「公孫乗『月賦』曰、『値円巖而似鉤、蔽脩堞如分鏡』。（公孫乗『月賦』に曰く、『円巖に値ひて鉤に似、脩堞に蔽はれ分鏡の如し』。）」とあるのを引く。

［引弦］引き絞られた弓。弓を引くという意味では『淮南子』人間訓に「丁壮者引弦而戦。（丁壮なる者　弦を引きて戦ふ。）」と見える。

5霧暗迷旗影　6霜濃湿剣蓮

［霧暗］霧のために辺りが暗くなる。梁簡文帝蕭綱「艶歌篇十八韻」（『玉台』巻七）に「霧暗窗前柳、寒疏井上桐（霧は暗し　窗前の柳、寒に疏なり　井上の桐）」とあり、陳・江総「隴頭水」二首其二にも「霧暗山中日、風驚隴上秋（霧は暗し　山中の日、風は驚く　隴上の秋）」と見える。

［迷旗影］旗のシルエットが識別できなくなる。「旗影」、ここは軍旗のすがた。梁・限定蕭繹「落日射羆」詩に「日度堋陰広、風横旗影浮（日　度りて　堋陰　広く、風　横たはりて　旗影　浮かぶ）」と見える。

［霜濃］霜がびっしりと降る。唐詩には数例見られるが、六朝詩では他の用例は見当たらない。

［剣蓮］剣に刻まれたハスの模様。『越絶書』外伝記・宝剣に「王取純鉤、薛燭聞之、忽如敗。有頃懼如悟。下階而深惟簡衣、而坐望之、手振払揚、其華捽如芙蓉（王　純鉤を取るに、薛燭　之れを聞き、忽如として敗る。頃く有りて懼るること悟るが如し。階を下りて深く惟ひ簡衣して、坐して之れを望み、手づから振るひ払揚すれば、其の華　捽くこと芙蓉の如し。）」という記事が見え、呉均「古意」詩二首其二に「玉鞭蓮花剣、金苣流星勒（玉鞭　蓮花の剣、金苣　流星の勒）」、庾信「正旦上司憲府」詩に「方垂蓮葉剣、未用竹根丹（方に垂る　蓮葉の剣、未だ用ひず　竹根の丹）」とある。

7此処離郷客　8遥心万里懸

［離郷客］ふるさとを離れた旅人。「離郷」は都の近郊にある小さな町を言うが、ここは故郷を離れるの意。宋・謝霊運「孝感賦」に「離郷眷壌、改時懐気。（郷を離れ壌を眷み、改時　気を懐ふ。）」と見え、梁・沈約「登玄暢楼」詩に「上有離群客、客有慕帰心（上に群れを離るるの客有り、客に帰るを慕ふの心有り）」とある。

［遥心］心を遠くの地に向ける。宋・謝恵連「七月七日夜詠牛女」（『文選』巻三十。『玉台』巻三、「詠」下無「夜」。）に「留情顧華寝、遥心逐奔龍（情を留めて華寝を顧み、心を遥かにして　奔龍を逐ふ）」と。

［心～懸］心を彼方に向ける。宋・袁淑「効曹子建楽府白馬篇」（『文選』巻三十一）に「嗟此務遠図、心為四海懸（嗟　此に遠図を務め、心　四海の為に懸く）」とあり、李善注は『荘子』外物に「心若県於天地之間。（心は天地の間に県るが若し。）」とあるのを引く。

陳・阮卓「関山月」

【本文及び書き下し】

1関山陵漢開　関山　漢を陵ぎて開き
2霜月正徘徊　霜月　正に徘徊す
3映林如璧砕　林に映じて璧の砕けたるが如く
4侵塞似輪摧　塞を侵して輪の摧けたるに似る
5楚師随晦尽　楚師　晦に随ひて尽き
6胡兵逐暖来　胡兵　暖を逐ひて来たる
7寒笳将夜鵲　寒笳　夜鵲に将ひ
8相乱晩声哀　相ひ乱れて　晩声　哀し

【日本語訳】

1砦のある山々は天の川よりも高いところで輝き
2この寒い夜の月は立ち去りかねた様子
3林を照らしては璧がこなごなになったかのように
4砦に射し込んでは馬車の車輪がくだけたかのように
5その昔、楚の軍隊はつごもりの月に光がないのと同じように滅び

6遊牧民族の兵は暖かさを求めて侵入して来た
7寒空に響く葦笛の音は夜のカササギの声といっしょに
8入り混じってもの悲しい夜の音となるのだ

【校勘】
○『文苑英華』巻百九十八・『古詩紀』巻百十六
2「正」、『英華』注云「一作『自』」。
5「尽」、『英華』作「進」。

【押韻】
「開」「来」「哀」、上平十六咍韻。「徊」「摧」、上平十五灰韻。灰・咍同用。

【作者】
五三一～五八九。幼くして聡明で、経書をよく読み、談論が巧みで、五言詩を得意とした。陳の文帝が即位すると、軽車都陽王府外兵参軍に任じられた。太建九（五七七）年、始興王陳叔陵が揚州刺史となると、その中衛府記室参軍となった。太建十四年、始興王陳叔陵が反乱を起こして敗死したが、陳の後主は阮卓の罪を問わなかった。至徳三（五八五）年、隋への使節に副使として参加した際、隋の文帝は阮卓を礼遇し、薛道衡や顔之推らとともに宴席で詩を賦させた。帰国後は眼疾によって隠退し、酒と文章を楽しむ生活を送っていたが、禎明三（五八九）年、陳が隋に滅ぼされると関中に赴こうとしたが、途中江州で卒した。現存する詩は六首のみ。『陳書』に本伝がある。

【語釈】
1関山陵漢開　2霜月正徘徊
［陵漢開］天の川よりも高いところで冴え冴えと見える。「陵」は凌に同じく、高所にのぼる。「漢」は天漢、天の川。「開」は漢・楊雄「甘泉賦」（『文選』巻七）に「帥爾陰閉、霅然陽開。（帥爾として陰閉し、霅然として陽開す。）」とあるように開朗、明るいの意。梁・周子良「華陽童授」詩に「懸台凌紫漢、峻階登絳雲（懸台　紫漢を凌ぎ、峻階　絳雲より登し）」と。
［霜月］寒い夜の月。鮑照「和王護軍秋夕」詩に「散漫秋雲遠、蕭蕭霜月寒（散漫として　秋雲　遠く、蕭蕭として　霜月　寒し）」とある。
［徘徊］畳韻。うろつく。また立ち去りがたい様。斉・王融「臨高台」に「還看雲棟影、含月共徘徊（還た看る　雲棟の影の、月を含みて　共に徘徊するを）」と。また梁・元帝蕭繹「関山月」にも「月中含桂樹、流影自徘徊（月中　桂樹を含み、流影　自ら徘徊す）」とあった。

3映林如璧砕　4侵塞似輪摧
［映林］林に光をうつす。梁・蕭雉「賦得翠石応令」詩に「映林同緑柳、臨池乱百川（林に映じて緑柳と同じく、池に臨みて百川を乱る）」と。
［璧砕］平たい環状の玉がこなごなになる。梁・元帝蕭繹「望江中月影」詩（『初学記』巻一作「江中月」。『英華』巻百五十二作「梁簡文帝『望江中月』」。）に「秦鉤断復接、和璧砕還聯（秦鉤　断たるるも復た接ぎ、和璧　砕かるるも還た聯なる）」（「鉤」、『初学記』作「鏡」。）と。
［輪摧］馬車の車輪がくだける。陳・張正見「門有車馬客行」に「安知太行道、失路車輪摧（安くんぞ知らん　太行の道、路を失ひて　車輪　摧かるるを）」と。

5楚師随晦尽　6胡兵逐暖来
［楚師随晦尽］春秋の昔、楚の軍隊はつごもりの月に光がないのと同じように滅んでしまった。『春秋』成公十六年経文に「六月……甲午晦、晋侯及楚子・鄭伯戦于鄢陵。楚子・鄭師敗績。（六月……甲午晦、晋侯　楚子・鄭伯と鄢陵に戦ふ。楚子・鄭の師　敗績す。）」と見える記事に拠る。「晦」は陰暦で月の最終日、月のない夜。
［胡兵］遊牧民族の兵。『史記』李将軍列伝に「是時会暮、胡兵終怪之、不敢撃。（是の時　会たま暮れ、胡兵　終に之れを怪しみ、敢へて撃たず。）」と見えるが、これは匈奴を指す。詩では次に掲げる陳・江総「関山月」に「映光書漢奏、分影照胡兵（映光書漢奏、分影照胡兵）」とあり、北周・王褒「関山月」にも「影虧同漢陣、輪満逐胡兵（影　虧けて　漢陣と同じく、輪　満ちて胡兵を逐ふ）」とある。
［逐暖］暖かさを求めて移動する。『魏書』西域伝・嚈噠国に「無城邑、依隨水草、以氈為屋、夏遷涼土、冬逐暖処。（城邑無く、水草に依隨して、氈を以て屋と為し、夏は涼土に遷り、冬は暖処を逐ふ。）」と。

7寒笳将夜鵲　8相乱晩声哀
［寒笳］寒い季節に聞こえて来るあし笛の音。宋・庾徽之「昭君辞」に「朔障裂寒笳、冰原斷代（馬+伏）（朔障に寒笳裂け、冰原に代（馬+伏）斷く）」と。
［将夜鵲］夜のカササギの鳴き声を伴う。梁・何遜「門有車馬客」に「寸心将夜鵲、相逐向南飛（寸心　夜鵲に将ひ、相ひ逐ひて　南に向かひて飛ぶ）」とある。
［相乱］入り混じる。沈約「夕行聞夜鶴」（『玉台』巻九）に「夜止羽相切、昼飛影相乱（夜止　羽　相ひ切し、昼飛　影　相ひ乱る）」と。
［晩声哀］夜になって聞こえて来る様々な音がもの悲しい。後の例になるが隋・盧思道「聴鳴蟬篇」に「長風送晩声、清露供朝食（長風　晩声を送り、清露　朝食に供す）」とある。また、曹植「洛神賦」（『文選』巻十九）に「超長吟以永慕兮、声哀厲而彌長。（超として長吟して以て永く慕ひ、声　哀厲にして彌いよ長し。）」と。

陳・江総「関山月」

【本文及び書き下し】
1兎月半輪明　兎月　半輪　明るく
2狐関一路平　狐関　一路　平らかなり
3無期従此別　期無し　此よりの別れ
4復欲幾年行　復た幾年の行ならんと欲す
5映光書漢奏　映光　漢奏を書し
6分影照胡兵　分影　胡兵を照らす
7流落今如此　流落すること　今　此くの如く
8長戍受降城　長く戍る　受降城

【日本語訳】
1ウサギがいるという半輪の月が明るく
2飛狐関に至る平らかな道を照らす
3今ここで別れたならば次に会えるのはいつのことか
4あと何年旅を続けなければならないのか
5蘇武はあの月の光の下、漢の天子への上奏文を書いたのだろうか
6月明かりが遊牧民族の兵を照らしたことだろうか
7故郷を離れて、このように落ちぶれてしまった
8受降城の守備の任に就いて長くなったから

【校勘】
○『古詩紀』巻百十四
2「狐」、底本原作「孤」、注云「拠『詩紀』巻一〇四改」。

【押韻】
「明」「平」「行」「兵」、下平十二庚韻、「城」、下平十四清韻。庚・清同用。

【作者】
五一九～五九四。六朝後期の文人。梁・陳・隋に仕えた。字は総持。済陽郡考城（河南省蘭考県）の人。名門に生まれ、十八歳で武陵王蕭紀の法曹参軍として初めて出仕した。後、梁の武帝にその詩才を高く評価された。太清二（五四八）年、徐陵とともに東魏への使者に択ばれたが、病気を理由に辞退した。間もなく侯景の乱が起こり都建康が陥落すると、江総は会稽へ、さらに嶺南へと難を避け、以後十数年を広州で過ごした。陳の天嘉四（五六三）年、文帝により中書侍郎として召還され、文帝、宣帝に仕えた。五八三年、後主が即位すると江総はその信任を得て高官を歴任し、至徳四（五八六）年には尚書令（宰相）となった。江総は宰相の位にあっても政治に関与せず、後主と日夜酒宴を張り詩文を作って楽しむばかりで、陳後主の「狎客」とされ、亡国の一因となったことを批判される。禎明三（五八九）年、隋が陳を滅ぼすと、隋に仕え上開府となり、開皇十四（五九一）年に卒した。
江総は亡国の臣としてその政治姿勢を非難されることが多いが、宮廷詩人として活躍し、艶麗な作風が大いにもてはやされた。一方、熱心な仏教信者であったため、

山中の仏寺を訪れた際の作品をいくつか残しており、そこには優れた山水描写が見られる。今、百首あまりが伝わる。

【語釈】
1兎月半輪明　2狐関一路平
［兎月］月の異称。ウサギが月にいるという伝説は『楚辞』天問に「夜光何徳、死則又育。厥利維何、而顧菟在腹（夜光　何の徳ありて、死すれば則ち又た育する。厥の利　維れ何ぞ、而ち顧菟　腹に在り）」と見える。また、庾信「七夕賦」に「兎月先上、羊燈次安。（兎月　先づ上り、羊燈　次いで安んぜらる。）」と。
［半輪］半月をいう。江総は「秋日登広州城南楼」詩でも「野火初煙細、新月半輪空（野火　初煙　細く、新月　半輪　空し）」と「半輪」の語を用いる。また、陳・賀循「賦得庭中有奇樹」詩には「密葉　由来　好しく帷を作るべく、星　稀に　漢　転じて　月輪　明し」とある。
［狐関］飛狐口をいう。河北省保定市の北、張家口市の南。古くから河北平原と北方の辺境とを繋ぐの要衝だった。『漢書』酈食其伝に「願足下急復進兵、収取滎陽、拠敖庾之粟、塞成皐之険、杜太行之道、距飛狐之口、守白馬之津、以示諸侯形制之勢、則天下知所帰矣。（願はくは　足下　急ぎ復た兵を進め、滎陽を収取し、敖庾の粟に拠り、成皐の険を塞ぎ、太行の道を杜ぎ、飛狐の口に距ぎ、白馬の津を守りて、以て諸侯に形制の勢ひを示せば、則ち天下　帰する所を知らん。）」とあり、顔師古は臣瓚の説を引いて「飛狐在代郡西南。（飛狐　代郡の西南に在り。）」とする。詩では梁・虞羲「詠霍将軍北伐」詩（『文選』巻二十一）に「飛狐白日晩、澣海愁陰生（飛狐　白日　晩れ、澣海　愁陰　生ず）」とあるのを引くが、「狐関」の語は六朝詩では他の用例が見当たらない。

3無期従此別　4復欲幾年行
［無期従此別］今ここで別れたならば再会の日は訪れない。江総には「隴頭水」二首其二に「無期従此別、更度幾年幽（期無し　此よりの別れ、更に幾年の幽を度らん）」と類似表現がある。「無期」は再会の時がないこと。漢・無名氏「古詩」五首（『玉台』巻一、作枚乗「雑詩」九首）其五に「美人在雲端、天路隔無期（美人　雲端に在り、天路　隔たりて　期無し）」と。「従此別」は今ここで別れたならば。漢・李陵「与蘇武三首」（『文選』巻二十九）其一に「長当従此別、且復立斯須（長く当に此れより別るべし、且く復た立ちて斯須す）」とある。
［幾年行］数年に及ぶ旅。「行」は行旅、行役。

5映光書漢奏　6分影照胡兵
［映光］輝く光。また光に照らされる。語は『西京雑記』

巻二に「（匡衡）勤学而無燭、隣舎有燭而不逮、衡乃穿壁引其光、以書映光而読之。（学に勤むるも燭無く、隣舎に燭有るも逮ばず、衡　乃ち壁を穿ちて其の光を引き、書を以て光に映じて之れを読む。）」と見える。また梁・劉孝綽「望月有所思」詩に「簾蛍隠光息、簾虫映光織。（簾蛍　光に隠れて息み、簾虫　光に映じて織る。）」とある。

［書漢奏］漢の天子に奏上する手紙を書く。『漢書』蘇武伝に「教使者謂単于、言天子射上林中、得雁、足有係帛書、言武等在某沢中。（使者をして単于に謂ひて、天子　上林中に射て、雁を得、足に帛書の武等　某沢中に在りと言ふを係ぐ有りと言はしむ。）」とあるように、月明かりの中、漢の天子に想像する手紙を書く蘇武の姿をイメージするものと思う。

［分影］反射した光。用例はあまり多くはないが、梁元帝蕭繹「夕出通波閣下観妓」詩に「竹密無分影、花疏有異香（竹　密にして　分影無く、花　疏にして　異香有り）」とある。

7流落今如此　8長戍受降城

［流落］故郷を離れ、他所の土地で落ちぶれる。双声。宋・孔欣「相逢狭路間」に「流落尚風波、人情多遷渝（流落して尚ほ風波あり、人情　遷渝多し）」とある。

［今如此］今、眼の前の状況がこのようであるからには。徐陵「関山月」二首其一にも「戦気今如此、従軍復幾年（戦気　今　此くの如し、従軍　復た幾年ならん）」とよく似た発想の句があった。

［長戍］ずっと長く守備をする。陸機「従軍行」（『文選』巻二十八）に「南陟五嶺巓、北戍長城阿（南のかた五嶺の巓に陟り、北のかた長城の阿を戍る）」と。

［受降城］漢の武帝が築いた砦の名。内モンゴル自治区ウラド旗の北。梁・任昉「奏弾曹景宗」（『文選』巻四十）に「豈直受降可築、渉安啓土而已哉。（豈に直に受降　築くべく、渉安に土を啓くのみならんや。）」とあり、李善注は『漢書』武帝紀に「遣因杅将軍公孫敖築塞外受降城。（〔武帝〕因杅将軍公孫敖を遣はして塞外に受降城を築かしむ。）」とあるのを引く。

北周・王褒「関山月」

【本文及び書き下し】

1関山夜月明　関山　夜月　明るく
2秋色照孤城　秋色　孤城を照らす
3影虧同漢陣　影　虧けて　漢陣に同じく
4輪満逐胡兵　輪　満ちて　胡兵を逐ふ
5天寒光転白　天　寒くして　光　転た白く
6風多暈欲生　風　多くして　暈　生ぜんと欲す
7寄言亭上吏　言を寄す　亭上の吏に
8遊客解鶏鳴　遊客　解く鶏鳴すと

【日本語訳】

1砦のある山々は夜の月が明るく
2白い月の光が孤立した砦を照らしている
3あの月が欠けて漢の偃月陣と同じように半月になったこともあったし
4満月になって遊牧民族の兵卒を追い掛けたこともあった
5寒くなるにつれて光はますます白く
6風が強くなって月に暈がかかろうとしている
7辺境の物見台の役人に言伝したいものだ
8出征兵士である私は鶏が時を作る声を真似するのがうまいのだよと

【校勘】

○『初学記』巻一、『文苑英華』巻百九十八、『太平御覧』巻四・『古詩紀』巻百二十三

1「夜月明」、『英華』注云「一作『今夜月』」。
2「秋」、『初学記』『英華』『御覧』作「愁」、『英華』注云「一作『秋』」。「孤」、『英華』注云「一作『関』」。
3「影虧」、『初学記』『英華』『御覧』作「半形」、『英華』注云「一作『影虧』」。『詩紀』注云「一作『半形』」。
4「輪満」、『初学記』『英華』『御覧』作「全影」。『英華』注云「一作『輪満』」。『御覧』作「金影」。『詩紀』注云「一作『全影』」。
5「天」、『初学記』『英華』作「灰」、『英華』注云「一作『天』」。「光」、『初学記』作「色」。

【押韻】

「明」「兵」「生」「鳴」、下平十二庚韻。「城」、下平十四清韻。庚・清同用。

【作者】

五一三？～五七六？。字は子淵、琅邪臨沂（山東省臨沂市）の人。梁の武帝はその才能を愛し、弟の潘陽王蕭恢の娘と娶せた。元帝の時には吏部尚書・左僕射に任じられた。承聖三（五五四）年、西魏の軍が江陵を陥落させると、降伏して長安に至る。庾信と並び称され、北朝でも優遇された。陳と北周とが和睦すると多くの南朝出身の文人が南方に帰ったが、庾信と王褒だけは帰ることができなかった。

梁にいた頃は華麗な詩風であったが、北朝に入ってからは関塞を描いた詩を多く残した。『周書』『北史』『梁書』に伝がある。

【語釈】

1関山夜月明　2秋色照孤城

［夜月明］夜の月が明るく光る。梁・劉峻「出塞」に「絶漠衝風急、交河夜月明（絶漠　衝風　急に、交河　夜月　明るし）」とある。「夜月」の語は宋・鮑照「中興歌」十首其三に「碧楼含夜月、紫殿争朝光（碧楼　夜月を含み、紫殿　朝光を争ふ）」と。

［秋色］秋に相応しい色である白。五行説で秋は金に配当され、色は白が配当されることから。ここは月の光をいう。梁元帝蕭繹「芳樹」に「桂影含秋月、桃色染春源（桂影　秋月を含み、桃色　春源を染む）」とあるが、『文苑英華』巻二百八は「秋月」を「秋色」に作る。六朝詩では秋らしい風景の意で用いられることが多い。斉・謝朓「望三湖詩」「葳蕤向春秀、芸黄共秋色。」

［孤城］孤立した砦。梁・任昉「奏弾曹景宗」（『文選』巻四十）に「遂令孤城窮守、力屈凶威。（遂に孤城窮守をして、力　凶威に屈せしむ。）」とあり、李善注は謝承『後漢書』を引いて「胡爽曰、『耿恭以甲兵守孤城於絶域』。（胡爽　曰く、『耿恭　甲兵を以て孤城を絶域に守る』。）」という。

3影虧同漢陣　4輪満逐胡兵

［影虧］月が欠ける。左思「呉都賦」（『文選』巻五）に「蚌蛤珠胎、与月虧全。（蚌蛤　珠胎し、月と虧全す。）」とあり、劉淵林注は『呂氏春秋』季秋紀・精通に「月望則蚌蛤実、群陰盈。月晦則蚌蛤虚、群陰虧。（月　望なれば　則ち蚌蛤　実ち、群陰　盈つ。月　晦なれば　則ち　蚌蛤　虚しく、群陰　虧く。）」とあるのを引く。ここは軍が半月の形に陣をしくこと。王褒には「従軍行」に「平雲如陣色、半月類城形（平雲　陣色の如く、半月　城形に類る）」という句がある。

［輪満］満月になる。梁・劉孝威「侍宴賦得龍沙宵月明」詩に「鵲飛空繞樹、月輪殊未円（鵲　飛びて　空しく樹を繞り、月輪　殊に未だ円かならず）」と。無名氏「出塞」に「旗作浮雲影、陣如明月弦（旗　浮雲の影と作り、陣　明月の弦の如し）」とあった。

5天寒光転白　6風多暈欲生

［天寒］寒くなる。晋・郭泰機「答傅咸」詩（『文選』巻二十五）に「天寒知運速、況復雁南飛（天　寒くして運の速やかなるを知る、況んや復た雁の南に飛ぶをや）」とあり、李善注は『荘子』譲王に「天寒既至、霜雪既降。（天寒　既に至り、霜雪　既に降る。）」とあるのを引く。

［光転白］月の光がますます白くなる。月光が白いことは「古詩十九首」其十九（『文選』巻二十九）に「明月何皎皎、照我羅床幃。（明月　何ぞ皎皎たる、我が羅床幃を照らす。）」と見え、李善注は『詩経』陳風・月出に「月出皎兮、佼人僚兮（月　出でて　皎たり、佼人　僚たり）」とあるのを引く。

［風多］風が強まる。梁元帝蕭繹「詠晩棲鳥」詩（『玉台』巻七）に「風多前鳥駛、雲暗後群迷（風　多くして　前鳥　駛く、雲　暗くして　後群　迷ふ）」と。

［暈欲生］月の暈が生じようとする。梁・朱超「舟中望月」詩に「入風先遶暈、排霧急移輪（風に入りて先づ暈を遶らせ、霧を排して急に輪を移す）」と風と暈を描く。

7寄言亭上吏　8遊客解鶏鳴

［寄言］言伝する。謝霊運「石壁精舍還湖中作」詩（『文選』巻二十二）に「寄言摂生客、試用此道推（言を寄す　摂生の客に、試みに此の道を用て推せと）」とあり、李善注は『楚辞』九歎・憂苦に「願寄言於三鳥兮、去飄疾而不可得。（言を三鳥に寄せんことを願ふも、去ること飄疾として得べからず。）」とあるのを引くが、「三鳥」を「三島」に作る。

［亭上吏］辺境の物見台の役人。宋・鮑照「出自薊北門」（『文選』巻二十八）に「羽檄起辺亭、烽火入咸陽（羽檄　辺亭に起こり、烽火　咸陽に入る）」と見える。

［遊客］旅人。ここは出征兵士のこと。曹植「雑詩」六首其二（『文選』巻二十九）に「類此遊客子、捐軀遠従戎（類たり　此の遊客の子の、軀を捐てて遠く戎に従ふに）」とある。

［鶏鳴］鶏の時をつくる声。ここは、『史記』孟嘗君列伝に「囚孟嘗君、謀欲殺之。孟嘗君使人抵昭王幸姫求解。幸姫曰、『妾願得君狐白裘』。此時孟嘗君有一狐白裘、直千金、天下無双。入秦献之昭王、更無他裘。孟嘗君患之、遍問客、莫能対。最下坐有能為狗盗者、曰、『臣能得狐白裘』。乃夜為狗、以入秦宮蔵中、取所献狐白裘至、以献秦王幸姫。幸姫為言昭王、昭王釈孟嘗君。孟嘗君得出、即馳去、更封伝、変名姓以出関。夜半至函谷関。秦昭王後悔出孟嘗君、求之、已去。即使人馳伝逐之。孟嘗君至関、関法鶏鳴出客。孟嘗君恐追至、客之居下坐者有能為鶏鳴、而鶏尽鳴、遂発伝出。（〔秦昭王〕孟嘗君を囚へて、謀りて之れを殺さんと欲す。孟嘗君　人をして昭王の幸姫に抵りて解かんことを求めしむ。幸姫　曰はく、『妾　願はくは君の狐白裘を得んことを』と。此の時　孟嘗君に一狐白裘有り、直　千金、天下無双なり。秦に入りて之れを昭王に献じ、更に他裘無し。孟嘗君　之れを患へ、遍く客に問ふも、能く対ふる莫し。最下の坐に能く狗盗を為す者有りて、曰はく、『臣　能く狐白裘を得ん』と。乃ち夜　狗と為り、以て秦宮の蔵中に入り、献ぜし所の狐白裘を取りて至り、以て秦王の幸姫に献ず。幸姫　為に昭王に言ひ、昭王　孟嘗君を釈す。孟嘗君　出づるを得て、即ち馳せ去り、封伝を更め、名姓を変へて以て関を出でんとす。夜半に函谷関に至る。秦の昭王　孟嘗君を出だせしを後悔し、之れを求むるに、已に去る。即ち人をして伝を馳せて之れを逐はしむ。孟嘗君　関に至り、関の法　鶏　鳴きて客を出だす。孟嘗君　追ふものの至るを恐れ、客の下坐に居る者に有能く鶏鳴を為す有り、而して鶏　尽く鳴き、遂に伝を発して出づ。）」とある「鶏鳴狗盗」の故事に基づき、鶏の鳴き声の真似をして関所を時間よりも早く開かせることをいう。鮑照「行薬至城東橋」詩（『文選』巻二十二）に「鶏鳴関吏起、伐鼓早通晨（鶏　鳴きて　関吏　起き、鼓を伐ちて早に晨に通ず）」と。